

シャー・ワリーウッラー・ディフラウイー著  
『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』

石田友梨 訳

1. 解題

本稿で翻訳するのは、シャー・ワリーウッラー・ディフラウイー (Shāh Walī Allāh al-Dihlawī, 1703-1763) の伝記『導師たちの息吹き (*Anfās al-‘arīfīn*)』(以下『息吹き』) に収録されている、ペルシア語の自伝『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編 (*al-Juz’ al-laṭīf fī tarjama al-‘abd al-ḍa‘īf*)』(以下『優雅なる一編』)である。著者であるワリーウッラーは、18世紀を代表するイスラーム学者のひとりであり<sup>1</sup>、『優雅なる一編』は、彼が自身の父であるアブドゥッラヒーム (‘Abd al-Raḥīm, 1644/5-1719) や叔父のアブッリダー (Abū al-Riḍā, d. 1690)、留学先での師匠たちの生涯と事績について記した『息吹き』の最後を飾っている。『優雅なる一編』においてワリーウッラーは、自らの出生より筆を起し、デリーからマッカへ巡礼し、マディーナでの留学を終え、帰郷の途に就くまでを中心に描いている。学問を修めるために遍歴した前半生こそが、自分の人生のなかで最も輝かしい時期であったとワリーウッラーがみなしていたことは、その題名より明らかである。

次に、本作品を和訳する学問的意義について述べる。イスラーム教の故地であるアラビア半島から、地理的にも文化的にも離れた南アジアに生きるムスリムにとって、デリー出身のイスラーム学者であるワリーウッラーは、地元の英雄的存在である。ワ

---

1 詳細については、拙稿「18世紀インドにおけるカリフ制社会論—イスラーム改革思想家シャー・ワリーウッラーの『究極のアッラーの明証』より—」『アジア太平洋討究』第25号、2015年、50-57頁を参照のこと。

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

リーウッラーは、イスラーム政権であったムガル朝が弱体化していく時代の南アジアにおいて、イスラーム教の教理や実践を正すイスラーム改革を唱え、危機に瀕していた南アジアにおけるイスラーム教の信仰を守ったとされている。たとえば、今日南アジアのイスラーム学において最も影響力のあるデーオバンド学院は、ワリーウッラーの改革思想の継承を謳っている<sup>2</sup>。その一方で、ワリーウッラーの評価に対する批判も、健全に行われてきた<sup>3</sup>。アラビア半島から各地へイスラーム改革思想が伝えられた時代にあり、ワリーウッラーの果たした役割を正しく捉えることは、18世紀におけるイスラーム思想の形成と展開を明らかにすることにつながるであろう。『優雅なる一編』では、故郷のインドと留学先のマディーナのそれぞれにおいて、ワリーウッラーが何を学んだかが述べられている。本作品を訳出することにより、第一には、18世紀インドにおけるムスリム子弟の教育の実態について、その一例を明らかにすることができる。第二には、ワリーウッラーの学問的背景を明らかにすることにより、彼がいかに自分の思想を形成していったかについての考察が可能になる。

続いて、本稿の底本について述べる。『優雅なる一編』が収録されている『息吹き』の原本が現存するかは不明である。写本は、ハイデラーバードの東洋写本図書館や、ラクナウのナドゥワトゥルウラマー図書館などに所蔵されている<sup>4</sup>。また、現時点において訳者は、19世紀末に出版されたとみられるデリー（D）版およびムルターン（M）版の二種類三冊の石版本の電子ファイルを手に入れている<sup>5</sup>。しかし、これらはすべて、保存状態の悪さにより判読不可能な頁が含まれている。それぞれどの写本に基づく校訂であるのかについても不明であるが、語句の異同はほとんど見受けられな

---

2 山根聡「南アジアのムスリムと近代—ウルトゥー語資料を中心に—」『イスラームにおける知の構造と変容—思想史・科学史・社会史の視点から—』（小林春夫他編）早稲田大学イスラーム地域研究機構、2011年、177頁。

3 Hermansen, M. K., "The Current State of Shāh Walī Allāh Studies," *Hamdard Islamicus*, vol. 11, no. 3, 1988, pp. 17-30; in *Shah Waliullah (1703-1762): His Religious and Political Thought*, M. I. Chagatai ed., Lahore: Sang-e-Meel Publications, 2005, pp. 683-693.

4 拙稿「インド地方図書館におけるシャー・ワリーウッラー作品の所蔵写本一覧」『アジア太平洋討究』第26号、2016年、263頁を参照のこと。ただし、記載した全ての写本について、その存在を実際に確認できたわけではない。

5 そのほか、ペルシア語およびアラビア語の原文に、ウルトゥー語の対訳を付したものや、ウルトゥー語訳のみの刊本もあるが、ここでは省略する。

い。さらに、『優雅なる一編』については、マウラヴィー・M・ヘダーヤト・フサイン (Mawlavi M. Hidayat Husain) による校訂と英訳が、早くも1912年の段階で『ベンガル・アジア協会誌』上に発表されている<sup>6</sup>。このことから、『優雅なる一編』の重要性を改めて指摘することができよう。このフサイン (H) 版は、現在インターネットで公開されており<sup>7</sup>、読者にとって最も入手が容易であることから、これを本稿の底本とした。このH版を、D版およびM版とも比較し、重要な異同や誤字などがある場合のみ脚注に記すものとする。

最後に、凡例は以下のとおりである。

- ・ [ ] は、底本であるH版の頁数を示す。なお、脚注の [H] はH版、[D] はD版、[M] はM版を示す。
- ・ [ ] は、訳語の補いを示す。
- ・ ( ) 内のアルファベット表記は、原語を示す。原語の転写法は、大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)に従う。ただし、原語がアラビア語由来のペルシア語の場合、アラビア語表記で統一する。
- ・ (= ) は、文意を明確にするための言い換えを示す。
- ・ 原文がアラビア語の箇所は、下線で示す。
- ・ 改行は、日本語訳に沿って行う。

## 2. 翻訳

[p. 170]

『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』

慈悲遍く慈愛深きアッラーの御名において

---

6 Husain, M. M. H., "The Persian Autobiography of Shāh Waliullah bin 'Abd al-Rahīm al-Dihlavī: Its English Translation and a List of His Works," *Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Bengal*, New Series, vol. 8, 1912, pp. 161-175.

7 Internet Archive, "Journal of the Asiatic Society of Bengal, new ser. v. 8 (1912)" [September 23, 2016. <<https://archive.org/details/mobot31753002183835>>].

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

それらに値する前に、諸々の恩寵 (ni'ma) を〔与え〕はじめられ、お望みの者に〔アッラーの諸〕名<sup>8</sup>についての知識と体感を授けられるアッラーに称讃あれ。諸々の奇跡 (karāmāt) の冠と首飾りに装飾され、諸々の贈物の品目と山積によって称えられる、我らが長 (sayyid) 〔預言者〕ムハンマドに祝福と平安あれ。また、宗教共同体 (milla) の確立と、その市場の流通が彼らによるところの、彼の一族と教友たちに〔祝福と平安あれ〕。

閑話休題。

貧者 (faqīr) 〔である〕、アブドゥッラヒームの息子ワリーウッラー (Walī Allāh b. 'Abd al-Raḥīm) —アッラーが彼と彼の両親を許され、両者と彼に施しをされんことを一は、『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編 (al-Juz' al-latif fī tarjama al-'abd al-da'if)』と名付けられた、これらの幾許かの言葉を語る<sup>9</sup>。

次のことを知れ。この貧者 (=ワリーウッラー) の誕生は、〔ヒジュラ暦〕第12世紀14年シャウワール月4日水曜日<sup>10</sup>、太陽の昇る頃のことであった。天文学者たちの幾人かは、〔天宮〕図の技術を用いて以下のように判じた。誕生の上昇点 (ṭāli')<sup>11</sup> は双魚宮の第2度、太陽は上昇宮 (=双魚宮) の第1度、金星はその第8度、水星はその第21度、土星は白羊宮の第10度、木星はその第15度であった。この年は、外惑星の合 (qirān-i 'ulwyayn)<sup>12</sup>の年であった。それ (=合) は〔白羊宮の〕第1度にあ

---

8 アッラーには、「慈悲遍く者 (al-Raḥmān)」や「慈愛深き者 (al-Raḥīm)」といった美称があり、その数は99とされる。

9 ワリーウッラーは、基本的に第三者の立場から自分について記述している。

10 西暦1703年2月21日水曜日。

11 「これ [=al-ṭāli' (引用者注)] は東の地平線に現れる黄道帯であり、そこの宮が上昇点 (アセンダント) の宮であり、その度が上昇点の度である」(山本啓二・矢野道雄訳「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル＝ビールニー著『占星術教程の書』(2)』『イスラーム世界研究』第5巻1-2号、2012年、318頁)。

12 「外惑星の合」とは、地球の外側を回る土星と木星の合のことであり (Parsi Wiki Open Dictionary, "qirān-i 'ulwyayn" <<http://parsī.wiki/dehkhodaworddetail-c2da198ee6d94073b9fa73c6013ef241-fa.html>> (2016年7月25日閲覧))、「合 [=al-qirānāt (引用者注)] とは、2つ、またはそれ以上の惑星が黄経上同じ場所に集まることである。しかし特に限定がなければ、それは土星と木星の合のことである」(山本・矢野訳「『占星術教程の書』(2)」、319頁)。

り<sup>13</sup>、火星はその(=白羊宮の)第2度、[ジャウザハルの]頭(ra' s)<sup>14</sup>は巨蟹宮にあった。アッラーは正しいことをご存じである。友人たちの幾人かは、[宗教の偉人('Azim al-din)]<sup>15</sup>という日付を[ワリーウッラーの誕生日に]見出した。

[ワリーウッラーの]ご両親—至高なるアッラーが両者の心(sirr)を清らかにされんことを—と、敬虔な者たちの集団は、この貧者に関する多くの吉兆を[ワリーウッラーの]誕生の前と、その[誕生の]後に見た。同胞たちのうちで親愛なる者と、親友たちのうちで偉大なる者の幾人かが、ある文書のなかで他の記録とともに、その諸々の出来事の詳細を残していたように。また、それを『明白なる言葉(Qawl-i jali)』<sup>16</sup>と[p. 171]名付けた。アッラーが報酬の素晴らしさによって彼に応えられんことを。彼に、また、彼の先祖たちと彼の子孫たちに対して、褒美を与えられんことを。彼の宗教と現世のうちに彼が望むものを、彼に許されんことを。

[ワリーウッラーは、誕生から]5年めの時、学校(maktab)に入り、着席した。

- 13 土星と木星の白羊宮における合を特に「大合(al-qirān al-a'ẓam)」と呼ぶ(山本・矢野訳『占星術教程の書』(2)、319頁)。1703年は大合の年ではなかったはずだが、事実であるかは問わず、ワリーウッラーの誕生が特別であったことを強調するための記述とみなした。また、前文で土星と木星は白羊宮にあると述べられているので、合が金牛宮で起こったとするH版の解釈は採用しなかった(būd [D, M]; thawr [H])。
- 14 ジャウザハル(al-jawzahar)については、以下の記述に詳しい。「傾斜天球の面が黄道面から傾く場合、必然的に、2つの天球は互いに向かい合う二地点で切り取り合う。これは、黄道が天の赤道と互いに向かい合う二地点で切り取り合うのと似ている。ジャウザハルという名前は、その二地点のいずれにもあてはまる。一方を他方と区別する時には、惑星がそこを通過して北に行く交点が頭であり、そこを通過して南に行く交点が尾である。ジャウザハル、頭、または尾が限定なしで用いられる場合は、月に関してである」(山本啓二・矢野道雄訳「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル＝ピールニー著『占星術教程の書』(1)」『イスラーム世界研究』第3巻2号、2010年、359頁)。
- 15 「アブジャド(abjad)」と呼ばれるアラビア文字の数値によって計算すると'Azīm al-dīnは1115になり、ワリーウッラーの生まれたヒジュラ暦1115年と一致する。すなわち、70 ('a) + 900 (ẓ) + 10 (y) + 40 (m) + 1 (a) + 30 (l) + 4 (d) + 10 (y) + 50 (n) = 1115。
- 16 ワリーウッラーの一番弟子であったムハンマド・アーシク(Muḥammad 'Ashiq)の散逸した著書『聖者の徳についての美しい言葉(al-Qawl al-jamil fi manāqib-i walī)』(G. N. Jalbani, *Life of Shah Waliyullah*, Lahore: SH. Muhammad Ashraf, 1993 (1973), p. 2)。

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

7年めに、〔ワリーウッラーの〕お父上様は、〔ワリーウッラーに〕礼拝をさせ、断食することを命じられた。また、割礼も当年に済んだ。さらに、次のようなことが〔ワリーウッラーの〕記憶に残っている。「当年の末、私は偉大なる『クルアーン (Qur'ān)』<sup>17</sup>を詠み終え、ペルシア語の本と概要を読みはじめた。10年めに、私は『師の注釈 (Sharḥ-i Mullā)』<sup>18</sup>を読んだ」。そして、自学 (mutāla'a) の道が完全に開かれた。

14年め、婚礼が行われた。このことについては、お父様は性急の極みであられた。姻戚関係者たち<sup>19</sup>が〔婚礼〕諸具の欠如の弁解を申し出た際、〔ワリーウッラーの〕お父様は、「急ぐことについては、ある秘密が存在する」と、その〔関係者〕一同に書かれた。その秘密は、後に明らかになった。というのも、結婚後まもなく、貧者 (= ワリーウッラー) の妻の母が亡くなった。その後まもなく、妻の母方の祖父が〔亡くなった〕。その後まもなく、この貧者の偉大なる父方の伯父シャイフ・アブッリダー・ムハンマド (Shaykh Abū al-Ridā Muḥammad) —彼の心を清らかにされんことを一の誠実なる息子シャイフ・ファフルアラーム (Shaykh Fakhr al-'Ālam) が世を去られた。その後まもなく、この貧者の〔異母〕兄シャイフ・サラーフッディーン (Shaykh Salāh al-Dīn) の母が亡くなられた。その後まもなく、お父上は痩せ衰えられ、さまざまな病が彼に襲いかかった。その後、彼の死という恐ろしい出来事が起こった。すっかりこれらの親族 (jam'iat) は四散してしまい、あらゆる人々に次のことが明らかになった。その頃に結婚をしていなかったならば、その後数年〔結婚の〕見込みを、実現する可能性はもてなかつただろう。

15年め、次のようであった。「私は父上と、師弟の誓い (bay'at) を行い、神秘

---

17 イスラーム教の聖典。

18 ウスマーン・ブン・ウマル・イブン・ハージブ ('Uthmān b. 'Umar Ibn Ḥajīb, 1175-1249) の『統語論についての満足 (*al-Kāfiya fī al-naḥw*)』に対する、アブドゥウッラフマーン・ブン・アフマド・ジャーミー ('Abd al-Raḥmān b. Aḥmad al-Jāmī, 1415-1493) の注釈書『『満足』の注釈についての輝く利益 (*al-Fawā'id al-dīyā'īya fī Sharḥ al-Kāfiya*)』 (Husain, "The Persian Autobiography," p. 162, n. 2)。

なお、脚注で言及する人物名、生没年、書名は、Muṣṭafā Dirāyatī ed., *Fihristgān nuskhahī hā-yi khaṭṭī-i Īrān (Fankhā)*, vols. 45, Tehran: Sāzmān-i Asnād va Kitābkhānah-i Miḥī-i Jumhūrī-i Islāmī-i Īrān, 2012-2015の表記をアラビア語表記にしたものを基本とし、出典の表記を一部改めている。

19 aṣḥār [D, M]; izhār [H].

主義 (ṣūfiya)、とりわけナクバンディーヤの師匠たちの修行に没頭した。対面観想 (tawajjuh)<sup>20</sup>、〔修行法の〕伝授 (talqīn)<sup>21</sup>、修行道 (ṭarīqat)<sup>22</sup>における作法の指導、神秘主義の賜衣 (khirqa)<sup>23</sup>の衣服について、正しく継承した (irtibāt durust namūdam)。ちょうどその年、『バイダーヴィー (Bayḍāwī)』<sup>24</sup>の一部を読んだ。[p. 172] お父上様は、たくさんの食事を用意され、〔貴賤を問わず〕あらゆる人々を招待された。そして、学課の免状 (ijāzat)<sup>25</sup>の冒頭を読まれた。伝統的諸学問 (fannūn muta'arifa) はすべて、この地域の習慣に従い、15年で終えられた。

ハディース<sup>26</sup>学については、『壁龕 (Mishkāt)』<sup>27</sup>は、〔「商売の書 (Kitāb al-bay')」から「作法の書 (Kitāb al-ādāb)」までの容易な箇所を除き、〕<sup>28</sup>そのすべてが読まれ、それはムタダーリクの韻律 (mutadārik) の免状となつた<sup>29</sup>。『ブハーリーの真正集 (Ṣaḥīḥ-i Bukhārī)』<sup>30</sup>の一部が「齋戒の書 (Kitāb al-ṭahārat)」まで〔読まれた〕。さら

20 「師と弟子が向き合って精神集中すること」(東長編著『アラビア文字で引くスーフイズム・グロッサリー』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域センター (KIAS)、2011年、15頁)。

21 「スーフイズム [= イスラーム神秘主義 (引用者注)] の知を授けること。転じて「入門、イニシエーション」」(東長編著『グロッサリー』、14-15頁)。

22 「道、修行道。また修行道を共に修する人々の集まり、流派、教団」(東長編著『グロッサリー』、37頁)。前述のナクシュバンディーヤは教団のひとつ。

23 「師が弟子に与える衣。入門時に与えられることもあれば、修行の完了を印可する印として与えられることもある」(東長編著『グロッサリー』、23頁)。

24 アブドゥッラー・ブン・ウマル・バイダーウィー ('Abd Allāh b. 'Umar al-Bayḍāwī, d. 1287) のクルアーン解釈書『啓示の光と解釈の機密 (Anwār al-tanzīl wa asrār al-tāwīl)』(Husain, "The Persian Autobiography," p. 163, n. 2)。

25 「認可・許可・免許、もしくはそれらを記した印可状・免状」(東長編著『グロッサリー』、1-2頁)。

26 イスラーム教の開祖である「預言者ムハンマドの言行を記録したもの」(大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、s.v.「ハディース」(小杉泰))。

27 ムハンマド・ブン・アブドゥッラー・ハティープ・ウマリー (Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Khaṭīb 'Umarī, d. 1349) の著書 (Husain, "The Persian Autobiography," p. 163, n. 4) 『燈の壁龕 (Mishkāt al-maṣābih)』。

28 [D, M] のみ挿入。

29 [D, M] のみ挿入。

30 ムハンマド・ブン・イスマーイール・ブハーリー (Muḥammad b. Ismā'il al-Bukhārī, 811-871) の著書 (Husain, "The Persian Autobiography," p. 163, n. 5)。



シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

に、「完全完璧な『預言者の美德 (Shamā' il al-nabi)』<sup>31</sup>を、お父様に対する学友たち幾人かの朗読によって、私は聞いた」。

クルアーン解釈学 (ilm-i tafsīr) については、「『バイダーヴィー』のクルアーン解釈の一部と、『証拠 (Madārik)』<sup>32</sup>のクルアーン解釈の一部を私は読んだ。小生にとって最大の恩恵のひとつは、啓示のそれぞれの意味や事情の熟慮と、クルアーン解釈〔書〕の参照とともに〔行われる〕、父の臨席する偉大なるクルアーンの勉強会に幾度か出席したことである。このことは、重要な開眼 (fath) をもたらした」。アッラーに称讃あれ。

イスラーム法学 (ilm-i fiqh) については、『『保護』の注釈 (Sharḥ-i Wiqāya)』<sup>33</sup>と『導き (Hidāya)』<sup>34</sup>が、二冊とも全部、簡単な部分を除いてどちらも読まれた。

法源 (uṣūl-i fiqh) については、『フサーミー (Husāmī)』<sup>35</sup>、『説明 (Tawḍīḥ)』<sup>36</sup>と

- 
- 31 ムハンマド・ブン・イーサー・ティルミズイー (Muḥammad b. 'Īsā al-Tirmidhī, 825–893) の著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 163, n. 7) 『預言者の美德とムハンマドの性質 (al-Shamā' il al-nabawīya wa al-khaṣā' il al-muṣṭafawīya)』。
- 32 アブドゥッラー・ブン・アフマド・ナサフィー ('Abd Allāh b. Aḥmad al-Nasafī, d. 1311) の著書『啓示の証拠と解釈の真理 (Madārik al-tanzil wa ḥaqā'iq al-ta'wil)』 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 163, n. 9)。
- 33 ウバイドゥッラー・ブン・マスウード・ブン・サドルッシャリーア・サーニー ('Ubayd Allāh b. Mas'ūd b. Ṣadr al-Shar'īa al-Thānī, d. 1350) の著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 1) 『『導き』の諸問題についての諸話の保護』の注釈 (Sharḥ Wiqāya al-riwāya fī masā' il al-Hidāya)』。『『導き』の諸問題についての諸話の保護 (Wiqāya al-riwāya fī masā' il al-Hidāya)』は、同著者の祖父マフムード・ブン・ウバイドゥッラー・ブルハヌッシャリーア (Maḥmūd b. 'Ubayd Allāh Burhān al-Sharī'a, d. 1274) による概要 (Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur (GAL)*, vol. 1, Leiden; Boston: Brill, 2012 (E. J. Brill, 1943), p. 468)。
- 34 アリー・ブン・アビー・バクル・マルギーナーニー ('Alī b. Abī Bakr al-Marghinānī, 1136–1198) の著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 2) 『『はじめ』の注釈についての導き (al-Hidāya fī Sharḥ al-Bidāya)』。『『はじめ』』は、同著者による実定法規 (furū') の概要『始まりのはじめ (al-Bidāya al-mubtadī')』 (Brockelmann, *GAL*, vol. 1, p. 466)。
- 35 フサームッディーン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・アフシーカシー (Ḥusām al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Akhsikathī, d. 1246) の著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 3) 『精粹の結合の精選 (al-Muntakhab majma' al-nukhb)』。
- 36 ウバイドゥッラー・ブン・マスウード・ブン・サドルッシャリーア・サーニー (前注33) による、自著『原理の訂正 (Tanqīḥ al-uṣūl)』の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 4)。



『暗示 (*Talwīḥ*)』<sup>37</sup>の〔適した〕<sup>38</sup>部分である。

論理学 (*manṭiq*) については、『『日覆い』の注釈 (*Sharḥ-i Shamsīya*)』<sup>39</sup>のすべてと、『『昇る処』の注釈 (*Sharḥ-i Maṭāli‘*)』<sup>40</sup>の一部である。

神学 (*kalām*) については、『『信仰諸箇条』の注釈 (*Sharḥ-i ‘Aqā‘id*)』<sup>41</sup>のすべてと、『『ハヤリー (Khayālī)』』<sup>42</sup>の一部である。そして、『『諸階梯』の注釈 (*Sharḥ-i Mawāqif*)』<sup>43</sup>の一部である。

37 マスウード・ブン・ウマル・タフターザーニー (Mas‘ūd b. ‘Umar al-Taftāzānī, 1323-1390) による、『説明』(前注36)の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 5)、つまり『原理の訂正』の疏『『訂正』の真理の開示への暗示 (*al-Talwīḥ ilā kashf al-ḥaqā‘iq al-Tanqīḥ*)』。

38 sāliḥ az *Tawḍīḥ* va *Talwīḥ* [D]; az *Tawḍīḥ* va *Talwīḥ* [H]; sāliḥ az *Tawḍīḥ* *Talwīḥ* [M].

39 アリー・ブン・ウマル・カーティビー・カズウィーニー (‘Alī b. ‘Umar al-Kātībī al-Qazwīnī, 1203-1276) の『論理の諸規則についての日覆い (*al-Shamsīya fī al-qawā‘id al-mantiqīya*)』に対する、ムハンマド・ブン・ムハンマド・クトゥブッディーン・ラーズイー (Muḥammad b. Muḥammad Quṭb al-Dīn al-Rāzī, 1295-1365) の注釈書『『日覆い』文書の注釈についての論理の諸規則の記 (*Tahrīr al-qawā‘id al-mantiqīya fī Sharḥ al-Risāla al-Shamsīya*)』 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 6)。

40 マフムード・ブン・アビー・バクル・スィラージュッディーン・ウルマリール (Maḥmūd b. Abī Bakr Sirāj al-Dīn Urmawī, 1198-1284) の著書『光の昇る処 (*Maṭāli‘ al-anwār*)』に対する、ムハンマド・ブン・ムハンマド・クトゥブッディーン・ラーズイー (前注39) の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 7) 『『光の昇る処』の注釈についての機密の輝き (*Lawāmi‘ al-asrār fī Sharḥ-i Maṭāli‘ al-anwār*)』。

41 ウマル・ブン・ムハンマド・ナサフィー (‘Umar b. Muḥammad al-Nasafī, 1070-1143) の『信仰諸箇条の要約 (*Mukhtaṣar al-‘aqā‘id*)』に対する、マスウード・ブン・ウマル・タフターザーニー (前注37) の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 8) 『『ナサフィーの信仰諸箇条』の注釈 (*Sharḥ al-‘Aqā‘id al-Nasafī*)』。

42 マスウード・ブン・ウマル・タフターザーニーの注釈書 (前注41) に対する、アフマド・ブン・ムサー・ヒーヤリー (Aḥmad b. Mūsā al-Khiyālī, 1426-1458) の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 9) 『『ナサフィーの信仰諸箇条』の注釈』の注疏 (*Ḥāshiya Sharḥ-i ‘Aqā‘id al-Nasafī*)』。

43 アブドゥッラフマーン・ブン・アフマド・アズドゥッディーン・イーギー (‘Abd al-Raḥmān b. Aḥmad ‘Azūd al-Dīn al-Ījī, 1301-1356) の『諸階梯 (*al-Mawāqif*)』に対する、アリー・ブン・ムハンマド・ジュルジャーニー (‘Alī b. Muḥammad al-Jurjānī, 1340-1414) の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 10) 『『君主の諸階梯』の注釈 (*Sharḥ al-Mawāqif al-sultāniya*)』。

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

神秘道 (sulūk)<sup>44</sup>については、『美質 (‘*Awārif*)』<sup>45</sup>の一部と『ナクシュバンディーヤの諸文書 (*Rasāyil-i Naqshbandīya*)』<sup>46</sup>の断片などである。

真理 (ḥaqā’iq)<sup>47</sup>については、『我が主ジャーミーの四行詩の注釈 (*Sharḥ-i Rubā’iyāt-i Mawlānā Jāmī*)』<sup>48</sup>〔と『明白 (*Lawā’ih*)』<sup>49</sup>〕、『『閃光』の注釈 (*Sharḥ-i Lama’āt*)』<sup>50</sup>の序文および『定義批判 (*Naqd al-nuṣūṣ*)』<sup>51</sup>の序文である。

〔アッラーの諸〕名の特性 (khawāṣ) と〔クルアーンの〕章句 (āyāt) については、お父様の特別な全集と、『百の利益 (*Mi’a al-fawā’id*)』<sup>52</sup>である。〔幾度かの免状に〔喜んで〕叫び声を上げた<sup>53</sup>。〕

---

44 「旅、旅程。スーフイズムでは、修行者を神に至る道を行く旅人と考えるが、彼らのたどるべき道のこと」（東長編著『グロッサリー』、32頁）。

45 ウマル・ブン・ムハンマド・スフラワルディー (‘Umar b. Muḥammad al-Suhrawardī, 1148-1226) の著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 11) 『知識の美質 (‘*Awārif al-ma’ārif*)』。

46 ナクシュバンディーヤの名祖ムハンマド・ブン・ムハンマド・ナクシュバンディー (Muḥammad b. Muḥammad al-Naqshbandī, 1318-1389) の言葉を集めた、ハーフィズッディーン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・ブハーリー (Ḥāfiẓ al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad al-Bukhārī, d. 1419) の著書と思われる (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 12)。

47 単数形は ḥaqīqa で、「一般にスーフイズムでは、シャリーア shari’a (戒律の順守)、タリーカ tariqa (修行道) の上に位置づけられ、修行の完成状態を示すのに用いられる」（東長編著『グロッサリー』、21頁）。

48 神秘主義的の四行詩に対する、アブドゥッラフマーン・ブン・アフマド・ジャーミー（前注18）の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 13) 『ジャーミーの四行詩の注釈 (*Sharḥ-i Rubā’iyāt-i Jāmī*)』。

49 アブドゥッラフマーン・ブン・アフマド・ジャーミー（前注18）の著書。[D]のみ挿入（[M]は判読不可能）。

50 イブラーヒーム・ブン・ボゾルグメフル・イラーキー (Ibrāhīm b. Bozorgmehr al-‘Irāqī, 1214-1290) の『閃光 (*Lama’āt*)』に対する、アブドゥッラフマーン・ブン・アフマド・ジャーミー（前注18）の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 14)。

51 ムハンマド・ブン・アリー・イブン・アラビー (Muḥammad b. ‘Alī Ibn al-‘Arabī, 1165-1240) の『台座の刻印 (*Naqsh al-fuṣūṣ*)』に対する、アブドゥッラフマーン・ブン・アフマド・ジャーミー（前注18）の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 164, n. 15) 『『台座の刻印』の注釈についての定義批判 (*Naqd al-nuṣūṣ fī Sharḥ-i Naqsh al-fuṣūṣ*)』。

52 アフマド・ブン・アフマド・ザバイディー (Aḥmad b. Aḥmad Zabaydī, 1410-1488) の『百の利益と礼拝と収益 (*Mi’a al-fawā’id wa al-ṣalāt wa al-‘awā’id*)』。

53 [D]のみ挿入（[M]は判読不可能）。

医学 (ṭibb) については、『『典範』抄本 (*Mūjiz al-Qānūn*)』<sup>54</sup>である。

哲学 (ḥikmat)<sup>55</sup>については、『『哲学の導き』の注釈 (*Sharḥ-i Hidāya-yi ḥikmat*)』<sup>56</sup>などである。

統語論 (naḥw) については、『満足 (*Kāfiya*)』<sup>57</sup>と、それに対する『師の注釈』である。

意味論 (ma‘āni) については、『詳細 (*Muṭawwal*)』<sup>58</sup>と『意味論の要約 (*Mukhtaṣar-i ma‘āni*)』<sup>59</sup>のうち、ザーダ師 (Mullā Zāda)<sup>60</sup>の注釈がなされた箇所である。

天文学 (hiy‘at) と数学 (ḥisāb) については、いくつかの要約本である。

この間に、それぞれの学問における優れた言葉が心に届いた。より一層の努力により、蒙が啓けていった。

- 54 フサイン・ブン・アブドゥッラー・イブン・スィーナー (Ḥusayn b. ‘Abd Allāh Ibn Sīnā, 980?-1037) の『医学典範 (*al-Qānūn fī al-ṭibb*)』を、アラー・ブン・アビルハズム・イブン・ナフィース (Alā b. Abī al-Ḥazm Ibn al-Nafīs, 1208-1288) が要約したもの (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 2)。
- 55 「叡智、知恵、智慧」(東長編著『グロッサリー』、21頁)。
- 56 ムファッダル・ブン・ウマル・アスィールッディーン・アブハリール (Mufaḍḍal b. ‘Umar Athīr al-Dīn al-Abḥārī, d. 1262?) の『哲学の導き (*Hidāya al-ḥikma*)』に対する注釈書。フサイン・ブン・ムイーヌッディーン・マイブディー (Ḥusayn b. Mu‘īn al-Dīn al-Maybudī, d. 1506) とムハンマド・ブン・イブラーヒーム・サドルッディーン・シーラーズィー (Muḥammad b. Ibrāhīm Ṣadr al-Dīn al-Shīrāzī, 1572-1641) の注釈書がインドでは教えられており、おそらく後者を指している (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 3)。『『哲学の導き』の注釈 (*Sharḥ Hidāya al-ḥikma*)』。
- 57 ウスマーン・ブン・ウマル・イブン・ハージブの著書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 4) 『統語論についての満足』(前注18)。
- 58 ムハンマド・ブン・アブドゥッラフマーン・ハティーブ・カズウィーニー (Muḥammad b. ‘Abd al-Raḥmān Khaṭīb al-Qazwīnī, 1268-1339) の『修辞学についての鍵の概要 (*Talkhiṣ al-miftāḥ fī al-ma‘āni wa al-bayān*)』に対する、マスウード・ブン・ウマル・タフターザーニー (前注37) の注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 6&7) 『『鍵の概要』の注釈についての詳細 (*al-Muṭawwal fī Sharḥ Talkhiṣ al-miftāḥ*)』。
- 59 ムハンマド・ブン・アブドゥッラフマーン・ハティーブ・カズウィーニー (前注58) の『修辞学についての鍵の概要』に対する、マスウード・ブン・ウマル・タフターザーニー (前注37) による2つめの注釈書 (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 6&7) 『意味論の要約 (*Mukhtaṣar al-ma‘āni*)』。
- 60 ムハンマド・アミーン・ブン・サドルッディーン・シルワーニー (Muḥammad Amin b. Ṣadr al-Dīn al-Shirwānī, d. 1627) (Husain, “The Persian Autobiography,” p. 165, n. 8)。

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

貧者（＝ワリーウッラー）の生涯の17年め、お父様は病気になられた。まさにその病のうちに、神の慈悲へと [p. 173] 加わられた（＝亡くなった）。死の病のなか、師弟の誓いと精神的指導（irshād）の免状を〔ワリーウッラーに〕与えられ、「彼（＝ワリーウッラー）の手は、私の手の如くである」という言葉を繰り返された。すべてのうちで最高のもとのみなしうる恩寵は、お父様が、この貧者について最大限の満足のうちにあり、最大限の満足のうちに世を去られたことである。この貧者に対する彼の配慮（tawajjuh）は、〔普通の〕父親が息子たちに〔する〕配慮とはまったく異なっていた。「父上が小生に対して持たれたほどのきめ細やかな情を、自分の子供や弟子に対して施す父親や教師や指導者を、私は見たことがない。おお、神よ。私と私の両親を許されんことを。両者が幼い私を育てたように、両者に慈悲をかけられんことを。10万もの〔私に与えられた〕情や慈悲や恩寵のすべてをもつて、その倍のものを両者に認められんことを。実にあなたは近くにあられ、叶えられる」。

お父様の死後、〔ワリーウッラーは〕12年ほど宗教的な諸書と理性的な諸書の授業に傾注した。それぞれの学問に思案を巡らし、祝福された〔父アブドゥッラヒームの〕墓での熟考（tawajjuh）に赴いた。それらの日々のなかで、〔神の〕唯一性と広大性（koshād）〔について〕の開眼を、神秘道の魅力と偉大な側面が可能にした。神秘直観的知識（‘ulūm wijdāniya）が、ひとかたまりになって（fawj fawj）降りてきた。四法学派<sup>61</sup>の諸書や、それらの法源とそれらの依拠するハディースの博覧の後、ハディース学者たるイスラーム法学者たちの方法<sup>62</sup>という、ある不可視の光の助けによる考えが生じた。その後、栄えある両聖都<sup>63</sup>への巡礼の熱望が心のうちに起こり、〔ヒジュラ暦第12世紀の〕43〔年の〕終わり<sup>64</sup>に、マッカ巡礼のため聖地へ赴いた。

〔ヒジュラ暦第12世紀の〕44年<sup>65</sup>、偉大なるマッカへの近接、光輝なるマディーナ

---

61 スンナ派には、ハナフィー、マーリク、シャーフィイー、ハンバルの4つの法学派がある。

62 預言者ムハンマドの言行と一致するような、法的解釈や判断を行うことを指すと思われる。

63 イスラーム教の二大聖地であるマッカとマディーナを指す。

64 1731年初夏。

65 1731年7月6日～1732年6月23日。

への巡礼、シャイフ・アブー・ターヒル (Shaykh Abū Ṭāhir)<sup>66</sup>—彼の心を清らかにされんことを—や栄えある両聖都の学者たちの他の者からのハディースの伝承に成功した。その間に、人類の長様 (= 預言者ムハンマド) —彼に最大の祈りと不変の祝福があらんことを—の輝く庭園 (= マディーナの預言者モスク) へと向かい、お恵みを得た。知識人 ('ulamā') やその他の者のうち、両聖都に定住した者たちと彩りある会話をした。神秘主義の賜衣すべてを含むとすることのできる、シャイフ・アブー・ターヒルの普遍的な賜衣を纏った。この年の終わり [p. 174]、マッカ巡礼を行った。45年の初め<sup>67</sup>、馴染みの祖国へと向かった。ラジャブ月14日<sup>68</sup>の金曜日、健康と無事を保ち祖国に着いた。

あなたの主人 (= アッラー) の恩寵について言えば、このか弱き者 (= ワリーウッラー) に対する偉大なる恩寵は、[両聖都の学者たちが] 彼を [継承の] 始まりの賜衣 (khil'at) と見なし、彼の手による最後の時代の開眼をなしたことである<sup>69</sup>。そして、イスラーム法学において称賛に値することは何かを指導した。[ワリーウッラーは] それを集めて、ハディースのイスラーム法学を基礎から築いた。ハディースの秘密、戒律の益、奨励されるもの、預言者様—彼に祝福と平安あれ—が至高なる神からもたらされ、教えられた残りのものを説明した<sup>70</sup>。この学問は、この貧者 (= ワリーウッラー) より前には、この学問の栄光にもかかわらず、この貧者の言葉よりも多く、それ (= ハディースのイスラーム法学) を語る者はいなかった。もし誰かこの話につい

66 アブー・ターヒル・ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・クルディー・マダニー (Abū Ṭāhir Muḥammad b. Ibrāhīm al-Kurḍī al-Madānī, d. 1733)。『息吹き』に収録されている『両聖都の師匠たちの瞳孔 (*Insān al-‘Ayn fī mashā’ikh al-Ḥaramayn*)』には、この人物の詳細について述べられた一章が設けられている [D: 191–192; M: 194–195]。

67 1732年初夏。

68 1732年12月31日。

69 おそらく、ハディースとイスラーム法学を統合したワリーウッラーの功績によって、最上の状態がもたらされたという意味。ワリーウッラーは、自分の時代に人類が新しい段階に到達したと述べている (Shāh Walī Allāh, *al-Taḥfīmāt al-ilāhiyya*, vol. 1, Hyderabad: Shāh Walī Allāh Academy, 1970, pp. 166–168; 拙稿「インドにおけるイスラーム神秘主義の靈魂論—シャー・ワリーウッラー・ディフラウイーを例に—」*Journal of the Asian Philosophical Association*, vol. 9 (1), 2016, pp. 123–125)。

70 [H] のみ bayān kard 挿入。

シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』（石田）

で疑惑があると言うならば、『偉大なる諸規則 (*Qawā'id-i kubrā*)』<sup>71</sup>の書を見よと言え。シャイフ・イッズッディーン (Shaykh 'Izz al-Dīn) が、諸々の努力をしても、この学問の十分の一の〔さらに〕十分の一にも到達しなかった〔と述べている〕。

〔両聖都の学者たちは、〕この時代の称賛に値する真実 (ḥaqq) であり、この時代において〔真実に〕到達していた神秘道の修行道に、靈感を受けた。〔ワリーウッラーは〕それを、『滂沱 (*Ham'āt*)』と『神聖なる慈悲 (*Alṭāf al-quds*)』と呼ばれる二つの文書に記し、〔預言者ムハンマドの〕慣行 (sunnat) の徒 (= スンナ派) の先人たちの信仰諸箇条を、証拠と証明によって確認した。それを、理性主義者たち (ma'qūliyān) の枝葉末節な疑い<sup>72</sup>から潔白なものとし、議論の余地がない方法で定めた。

四つの完成の学 ('ilm-i kamālāt-i arba'a)、すなわち、創造 (ibdā') と被造物 (khalq) と執行 (tadbir) と保留 (tadalli) には、それら全体によって人間性〔を形成するところ〕の諸魂 (nufūs) の能力の学と、各人の完成と結果〔の学という〕この縦横があり、〔両聖都の学者たちは、この二つの学に〕恩恵をもたらした。これら二つの学はどちらも輝かしいが、この貧者 (= ワリーウッラー) より前には誰もその周囲を巡らなかった。

〔両聖都の学者たちは、〕この時代の益がそこにあるところの実践哲学 (ḥikmat-i 'amali) を、完全な説明の広大さによって示し、その強化の調整を、書物 (= クルアーン)、慣行、教友たちの諸事績によって与えた。預言者様—彼に祝福と平安あれ—から伝えられた宗教の学であるものと、〔それに〕含まれているもの [p. 175] や改竄されたもの<sup>73</sup>と、慣行であるものと、異端派のそれぞれが行うものとの区別について、説明をうちたてた<sup>74</sup>。

71 イッズッディーン・アブドゥルアズィーズ・ブン・アブドゥルサラーム・スラミー ('Izz al-Dīn 'Abd al-'Aziz b. 'Abd al-Salām al-Sulamī, d. 1262) の『偉大なるイスラーム法の諸規則 (*Qawā'id al-sharī'a al-kubrā*)』(Husain, "The Persian Autobiography," p. 167, n. 1; Brockelmann, *GAL*, vol. 1, p. 554)。

72 khas wa khāshāk-i shubaha-yi [H]; khas wa khāshāk wa yakhālat [sic.] [D]; khas wa khāshāk wa bakhālat [M].

73 [D, H] のみ muḥarraf 挿入。

74 sākhṭand [D, M]; sākhṭe [H].

[対句]<sup>75</sup>

それぞれの毛根に舌があっても  
彼 (= アッラー) の称賛に足ることはない

万有の主人であるアッラーに称讃あれ。

### 3. 使用原典と略号

D: Shāh Walī Allāh, *Anfās al-‘ārifīn*, Delhi: Maṭba‘ Aḥmadi, n. d., pp. 193-196.

H: Husain, Mawlawi M. Hidayat, “The Persian Autobiography of Shāh Waliullah bin ‘Abd al-Raḥīm al-Dihlavī: Its English Translation and a List of His Works,” *Journal and Proceedings of the Asiatic Society of Bengal*, New Series, vol. 8, 1912, pp. 170-175.

M: Shāh Walī Allāh, *Anfās al-‘ārifīn*, Multan: Islāmi Kutubkhānah, n. d., pp. 197-200.

### 4. 謝辞

本稿は、JSPS 科研費15K21440の助成を受けたものである。『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』を含む『導師たちの息吹き』の訳出に初めて取り組んだのは、院生の頃であった。石版本の文字の判読にも苦勞していた訳者を辛抱強く、暖かにご指導くださったのは、京都大学人文科学研究所稲葉稜教授と、当時同研究所の日本学術振興会特別研究員 (PD) であった青山学院大学文学部二宮文子准教授である。また、天文学に関する記述については、イエルサレム・ヘブライ大学特別研究員諫早庸一氏と国立天文台より、貴重なご教示を数多くいただいた。ご協力いただいたこれらの方々に、心からの感謝を捧げたい。ただし、本稿における一切の瑕疵は訳者に帰されるべきものである。

---

75 [H] のみ biyt 挿入。